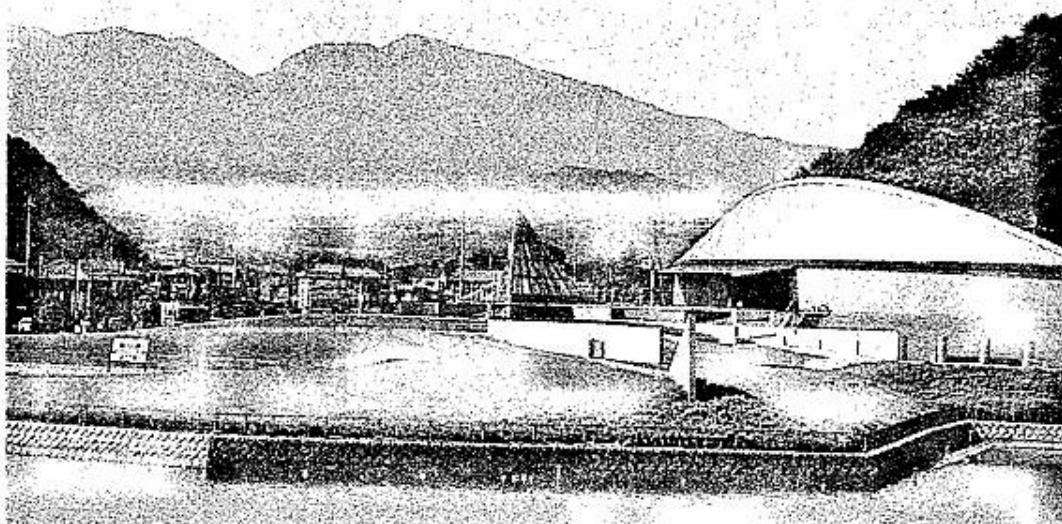


平成十九年三月三十日（金）

第三六四回 史跡めぐり（バスツアー）

# 赤城山麓を訪ねる

NPO法人 越谷市郷土研究会



岩宿博物館と赤城山の遠望

第三六四回 史跡めぐり（バスツアーア）

# 赤城山麓を訪ねる

日 時 平成十九年三月三十日（金）

集 合 JR南越谷駅前 午前七時二十分

・コース 南越谷駅前 || 岩宿の里（岩宿遺跡・

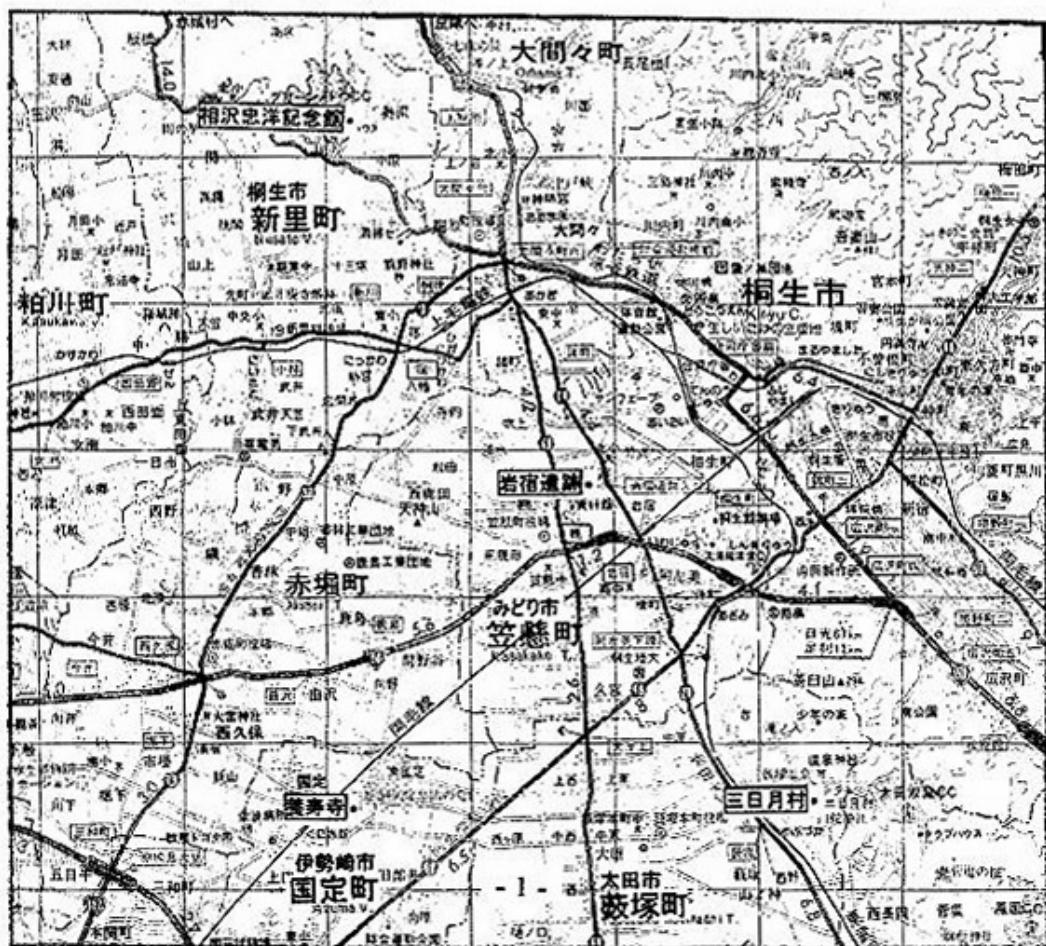
岩宿博物館、カタクリ群生地・昼食）  
|| 相沢忠洋記念館 || 養寿寺（国定忠治  
の墓・遺品資料館） || 三日月村

（木枯し紋次郎の故郷） || 南越谷駅前  
(解散・午後七時四十分予定)

・参加費 五、五〇〇円（交通費・入館アトラクション料

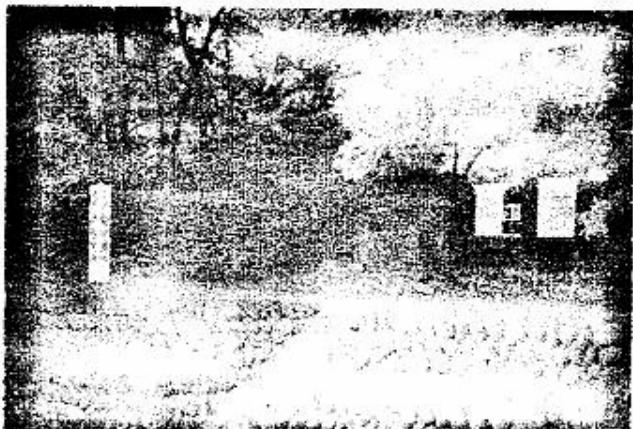
・資料代・保険料を含む）

・案内者 常任理事 水上 清



## ◆ 岩宿の里（みどり市 笠懸町）

笠懸町の中央近くにある稻荷山と琴平山は、コナラやクヌギが生い茂る笠懸町を代表する里山である。稻荷山の南斜面には史跡岩宿遺跡があり、北斜面には関東でも有数のカタクリ群生地がある。この二つの丘陵は、岩宿遺跡の国指定をきっかけに丘陵の西側に建設された岩宿博物館とその周辺を含めて公園化整備されて、現在「岩宿の里」と呼ばれている。毎年三月末から四月初めには「岩宿の里カタクリさくらまつり」が行われる。

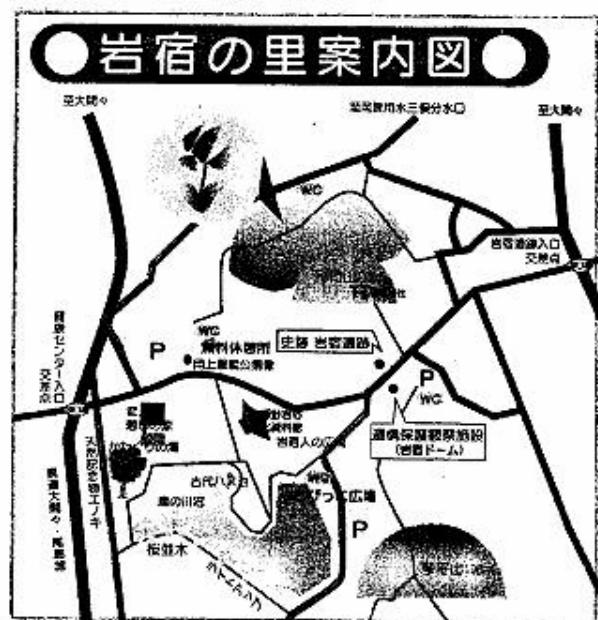


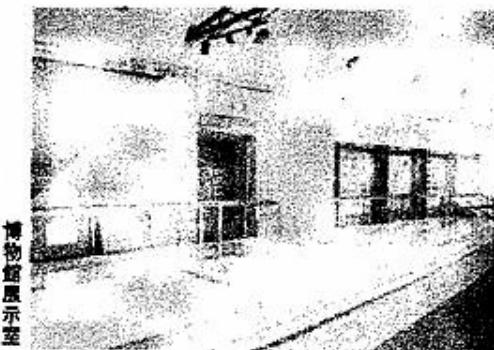
### ● 岩宿遺跡（国指定史跡）

稻荷山と琴平山の間の切通しになつた道際のローム堆積層の中から、昭和二一年、地元の当時無名の研究者であつた相沢忠洋氏が数個の黒曜石の石器を発見した。

それまでは、日本に人類が住み始めたのは、ローム層の堆積が終わつた紀元前九〇〇〇年頃とするのが考古学界の定説になつてゐた。相沢氏の発見はこの定説をくつがえし、人類の足跡をいつきに紀元前三五—一〇万年まで引き上げた。

昭和二四年には明治大学考古学研究室によつて第一次発掘調査が行われた。さらに約二〇年後の同四五年と四六年に東北大学考古学研究室が第二次・三次の発掘調査を行つた。その結果、尖頭器・彫刻刀・錐・チヨツバーなど数千点の石器が発見された。そして





博物館展示室



岩宿ドーム

これらの石器が出土した層が、土器をともなわないローム層であることが  
ら、この時代を旧石器時代、先土器時代、あるいは岩宿時代と呼ぶようになつた。地質学的には上部更新世の時代になる。  
その後、各地でローム層中の遺物発見がなされたが、岩宿遺跡は我が  
国で最初に確認された旧石器時代遺跡として貴重なもの。昭和五四年、國  
の史跡に指定され、その保存整備が進められた。

### ● 岩宿遺跡遺構保護観察施設（岩宿ドーム）

相沢忠洋氏はこの座面の赤土の中から小さな石片を発見した。現在は  
遺構保護観察施設が整備され、地層の観察ができるほか、発見当時の自然  
環境や数万年前の人々の生活の様子が映像で見ることができる。

### ● 岩宿博物館

三万年の昔に日本列島で展開された人類の生活の歴史を、全国的な規模での展示資料を通して再現。「岩宿時代文化の発見」「岩宿の発掘」「人類の時代と環境」「岩宿時代の暮らし」の四コーナーに分けて展示、その方法は映像を多く導入し、分かりやすく解説している。



岩宿出土の石器



岩宿人の広場

### ● 岩宿人の広場

広場では世界各地の代表的な旧石器時代の住居三棟を復元している。馬の皮で覆われた住居、三棟が連結した住居、マンモスの骨で作られた住居を見学できる。広場内の植物は数万年前の岩宿の地の環境に合わせ植えられている。

### ● カタクリ群生地（市指定天然記念物）

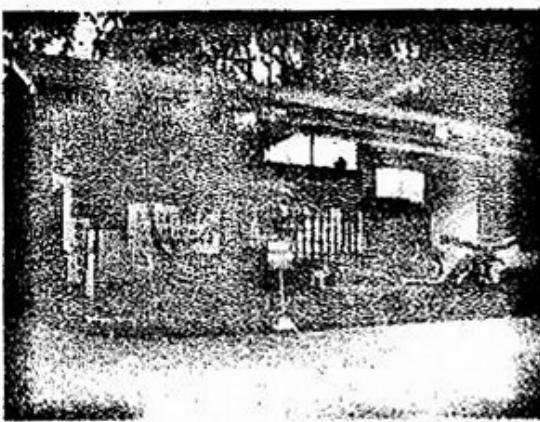
コナラやクヌギが生い茂る稻荷山の北斜面二・四ヘクタールほどに自生する関東でも有数の群生地。三月下旬から四月初めが花の見頃。山裾に広がる花群れは足の丈夫でない方でも楽しめる。

### ◆ 相沢忠洋記念館（桐生市新里町）

日本の歴史を塗り換えた「岩宿遺跡」の発見者、相沢忠洋の旧石器をテーマとした記念館で、平成三年開設。この記念館には、槍先形尖頭器を始め、赤城山麓の赤土に賭けた執念が実り、発見された二ヶ所の遺跡のうちより約三〇〇点の石器や、縄文早期の土器片、自筆原稿、芹沢長介先生との往復書簡、復元図、パネル図版、写真、表彰関係品、書籍、カメラを始め愛用の遺品等を展示している。館内では岩波映画社作製の「太古への夢、岩宿遺跡」をVTRで放映している。

### ● 相沢忠洋（一九二六年八九）

大正一五年東京・羽田で生まれ、八歳で鎌倉に移りここで古代遺物に接し心惹かれる。一一歳で桐生に転居。浅草の廢物屋に奉





公しながら小学校を卒業、桐生市立青年学校を中退して横須賀海兵団に入団。戦後、桐生市で行商の傍ら研究を重ね、昭和二年岩宿遺跡を発見、二四年明治大学考古学教室との共同調査で縄文時代以前に旧石器時代があつたことを立証し、旧石器文化研究の先駆けとなる。二三年東毛考古学研究所を設立。五三年には赤城人類文化研究所を設立し、赤城山麓の旧石器時代遺跡の調査に当たる。昭和三六年群馬県功劳賞、昭和四二年吉川英治賞を受賞。著書に「岩宿の発見」「赤城山ろくの旧石器文化の研究」「赤城山麓の旧石器」(共著)など。平成一年、六二歳で死去。

### ◆養寿寺(伊勢崎市国定町)

天台宗、金城山と号し、永保三年(一〇八三)國榮の開基と伝える寺。

境内には侠客国定忠治(一八一〇~五〇)の墓のほか、忠治の愛用した合羽・駒札などの遺品七〇点を展示した国定忠治遺品資料館も開設されており、「忠治の寺」として親しまれている。また忠治の墓石を削って飲むと、賭け事に強くなるなどともいわれ、たびたび削り取られるので、金柵をめぐらせて近づけないようになっている。その隣には巨大な石碑が建てられており、地元の人たちがいかに郷土の誇りとしているかが伺える。また、忠治の墓は伊勢崎駅に近い善應寺の境内にある。



(国定忠治の碑)

(国定忠治の像)

## 国定忠治の生涯



忠治は徳川十一代家斎の時文化七年、上野国佐波郡国定村に生る。

父は長岡与五左衛門、母伊代は新田郡綿打村五衛門の出で十七才の時に嫁入している。父母の間には二人の子供がいる、長男忠治次男友蔵の二人である。

忠治の家は素封家で村でも財産家である。子供の時の忠治は養弁寺の住職貞然和尚の弟子として学問をしたが大の苦手であり、常に子供達をあつめては暴れまわっていた。一時あまりいたずらなので母の実家にあづけられた。十三才の正月草博奕で二両勝つたのが初めてで其の数日後には十三両勝つた。それ以後は次第に身を持ちくすし博徒となつて行くのである。

十七才の時博奕のいきかいで人を殺している。二十二才の時境町の門二という親分より盃をもらいまもなく純張を門二より譲られる。

天保五年忠治二十四才の春、三木の文藏の一件から島村の伊三郎を切り其の足で信州路に飛んだ。此の時大戸の関所の間道を通つたのである。(此の時文藏が伊三郎を切つた刀が備前長船則光の一尺三寸の長

ドスで其の場で刀を文藏よりもつて居る)その後松本の博徒勝太と云う者の家にやっかいになり信州で暴れていたが、伊三郎殺し以米八州の手は再び厳しくなる。身の置きどころの無くなつた忠治、

其の年の初秋上州に帰り其のまま赤城の山に立て籠つた。此の話を聞いて居残つて居た乾分は勿論、四方八方から山を訪ねて盃を貰い大変な勢で殖えた。此の時の乾分の数は「俺がさあやつて来いと云えば一日にして四百、十日に四千は集まる」と云つたと云ふ。天保六年忠治二十五才の時、主馬の民五郎が主村の京蔵、主馬の二人親張に手を出した事から主馬の民五郎が半山剣を喰わされた。忠治もこれを知ると八才のオ、五才の秀吉をつれて赤城から一氣逆襲をして其の日の内に又赤城にこもつた。

二十七才にして大前田英五郎親分より兄弟分の盃をもらふ。忠治は十六も年長である大前田親分に先輩としての礼を尽し後年忠治が

諸国頼役に伍して飛ぶ鳥落す勢になつてからも栄五郎には常に両手をついて話をしたと云ふ。

天保七年忠治の乾分兆平が信州の波羅七に旅先で殺された。忠治は「俺の身内が他国の者に息の根を止められたんじやあ上州の長脇差の男がたたねえ」と云つて単身信州に向つたが、乾分も其の後を鉄砲やら鎌やらかついで二十数名一緒に走り大戸関所を刀を抜き放つて通りぬけた。云々と知れた関所破りである。忠治が大戸の関所を破つたのは此れで二度目である。

忠治の無法もちつと度がすぎた。

一説には此の時間関所役人は皆にげでいてだれもいなかつたと云ふ説もある。大戸関所は信州北国通りで上州草津、沼田を経て奥州会津への往来の要路として安城主板倉主計頭の藩臣が厳しく閑を固めていたのである。若し法の事を潜つて関所抜をした者があれば関所の辺りで皆磔刑にしたのが徳川政治の定めである。

天保七年関東の大飢饉である。忠治は赤城を降り自分の身代を売りはらい其れ以後は農民を救う事で身内の者達と心を一つにして働いた。江戸からの金飛脚より金をうばい小判の雨をふらせたのも此の時である。

天保八年、大塙平八郎の使者が忠治を訪ねて来る。忠治は平八郎義革に参加の意を表わし此の一件を円蔵に話した。円蔵は此の一件を喜ばず忠治を諫め、其の諫めにさすがの忠治も此の一件から手を引いた。

其の頃である田部井の磯沼と云う溜井があり、これを掘り農民を救う事が出来た。

天保八年の三月赤城から降りた忠治は賭場の見廻りをした時円蔵に会ひ引揚る様に云われて引揚げ、忠治が去つて間もなく八州廻りの手人があり貸元に座つた文蔵と才市が御用辨となり此年の冬には文蔵は脣首、翌天保九年才市も打首となつた。それやこれで忠治に対する八州の手は次第に峻烈を極めて來たので流石の忠治も危機刻々と身に迫るのを知り、天保五年以来四年間住み馴れた赤城の山を引払う事にし関西に長い鞋をはく決心をした。だが此時には何処にも人相巣が配布され一足も踏み出す事も出来ず乾分金部に貯へを分配して「みな気ままに行け」と申し渡して忠治はただ一人会津城下まで落ち延びた。天保十二年の冬、民五郎が主馬に利根川べりに誘い出されて川原で主馬に殺された。



忠治園を売つて六年、天保十三年ひそかに上州にもどり赤城に隠れ、其で民五郎の最後を耳にした。刻を許さず忠治は乾分十八人と共に主馬を民五郎の殺された川原まで引っぱり出して民五郎のかたきを取つた。

忠治赤城に帰つた天保十三年の八月十九日田部井村にひまばくちの賭場を開いた。忠治、円蔵その他重立った乾分もみな出張つていた。此の時に関東取締出役吉田佐平の引いる捕方六百人で一瞬にして賭場をかこんだ。此の時の物がたりが勘助と浅次の話しだである。

此れぞ忠治は又赤城の山を落ち、会津から越後路へと草鞋をはいた。

天保十四年から三年間を旅島で暮した忠治、弘化二年の冬また淋しく赤城に戻つて來た。名だたる乾分はすでに「く悄然」として居た。国定村には妻のお鶴もお町もお徳もいる。忠治は此の三人の誰かのところへ忍んでは酒をのみ、せめて人間らしい温い生活を楽しんで居た。四年間は事もなく経つた。

嘉永二年十一月忠治三十九才、長脇差の烈しい渡世に疲れたのか縄張りを境川の安五郎に譲つた。お姉と共に会津方面で静かに世を送りたいと思つてゐた。

翌二年七月二十一日の夜、忠治はお町の家に行きお町の兄と共に酒を飲み、其の夜中風疾が発したのである。

嘉永三年八月二十四日発病以来僅か一ヶ月と四日、田部井村名主宇右門の土蔵の中で御用辨となる。其の時の役人、関東八州取締り役与力吉田佐五郎、高野啓助、中川誠一郎、吉田三郎、佐藤儀右エ門外七十余名である。

二十六日まず江戸送りとなつた忠治は繩と刑が極り、此の年の十二月十六日江戸伝馬町の牢を引き出され大戸の闇所へ送り返される事になつた。十二月十六日江戸出発、忠治鶴龍を守る者二百余名で十九日三ノ倉宿に入り翌二十日無事大戸へ着いた其の夜、

「当地の加部安左エ門の酒はうまい一度振舞つて貰いたい。」と酒を求めた。翌二十一日は即ち辭の執行日。

「上州の酒をのませてもらい、上州の土となるあつしや本望ですよ。」役人は更にもう一杯と嘗うと「お仕置になると云う時に飲み過ぎるのは死ぬのを怖る者だ。」と云つて飲まず、「どうも皆さま種々御世話様になりました。」と挨拶したと云ふ。

時に四十才嘉永三年十一月二十一日 本名長岡忠治郎

法名 長岡院法華花榮居士

妻つる 長最院鶴善妙鏡太輔

辞世 憐しむより うらみ大戸の わが身ゆゑ

あの世に行くぞ 楽し長岡

(養寿寺のパンフレットより)

◆

三日月村（太田市藪塚町）

笹沢左保の小説の主人公・木枯し紋次郎の故郷三日月村を当時の時代考証に基づいて復元したもので、藪塚温泉内の広大な丘陵地を利用して、昭和五五年にオープンした。

村内は江戸時代後期の景観・風俗に合わせて村落や街道が形成され、赤城の山を背景に水車小屋や炭焼小屋・番所・名主屋敷・旅籠・茶屋・「木枯し紋次郎」の生家などを見ながら、ほぼ四百歩の道筋を江戸の気分で歩くことができる。

また入村時に衣

装小屋で好みに合わせて当時の衣装が借りられるほか、使用者である貨幣も、両替所で交換する铸物製の文鏡だけという趣向を凝らしている。新スポットとして木枯し紋次郎記念館「かかわりーな」がオープン、ここではより近く木枯し紋次郎を感じ、より詳しく著者が「木枯し紋次郎」を知ることができる。「冒険好きの人向きには、地底冒険の『怪異現洞』があり、また常識を疑う体験ゾーン「戯遊満館」、「絡縄屋敷」「不可思議土蔵」もあってますます楽しめる。





● 笹沢 佐保（一九三〇—二〇〇二）  
推理作家。本名勝。昭和五年、横浜生まれ。関東学院高等部を卒業後、郵政省簡易保険局に勤務。昭和三五年、処女長編「招かざる客」を刊行。構成の優れた本格推理小説として好評を博す。三六年、炭坑争議の組合分裂をテーマにした「人食い」で日本探偵作家クラブ賞を受賞、同年佐保に改名し作家生活にはいる。本格ミステリー小説や風俗もの、時代小説などを手掛ける。四五年頃から股旅ものにも新境地を開拓し、「木枯し紋次郎」シリーズはテレビ化もされ大ヒット。多作ぶりはつとに有名で、単行本は三七七冊を超える。平成一四年、七一歳で死去。

### 主な参考資料

- |            |              |            |              |                |               |                 |                     |              |
|------------|--------------|------------|--------------|----------------|---------------|-----------------|---------------------|--------------|
| 郷土資料事典・群馬県 | 大日本百科事典ジャボニカ | 二〇世紀日本人名辞典 | 岩宿の発見（相沢忠治著） | 史跡岩宿遺跡（パンフレット） | 岩宿博物館（パンフレット） | 相沢忠洋記念館（パンフレット） | 養寿寺・忠治遺品資料館（パンフレット） | 三日月村（パンフレット） |
| 人文社        | 小学館          | 日本アソシエーツ   | 講談社          |                |               |                 |                     |              |